

## 新潟リハビリテーション大学開学への道

## Spirit and Efforts to the Development of Niigata University of Rehabilitation

初代学長 大澤 源 吾\*

Gengo OSAWA, M.D., Ph.D.

Ex-President

Niigata University of Rehabilitation

新潟リハビリテーション大学開学までの歴史的な経緯について、まず述べたい。

新潟リハビリテーション大学誕生の母体となったのは、1995（平成7）年4月にこの村上の同じ土地で出発した新潟リハビリテーション専門学校であります。理学療法士と作業療法士の業務分野に関する法律はすでに1965（昭和40）年に、言語聴覚士はかなり遅れて1997（平成9）年に制定されましたが、新潟リハビリテーション専門学校開校当初は、全国的にみても同種の教育機関がまだ少なく、新潟県内では国立犀潟リハビリテーション学院だけが理学療法士及び作業療法士の養成を行っていたにすぎませんでした。従って、言語聴覚士養成校としては新潟県内で初めての施設であり、山形、福島、群馬、長野、富山などの隣県からも入学者が多く集まっていました。以来、2012年3月までの16年間に1045名の理学療法士、作業療法士および言語聴覚士を世に送り出しております。

実は、この新潟リハビリテーション専門学校では設立当初からすでに大学昇格が構想されていたことがうかがわれます。といいますのは、この専門学校が3年制としての開校ではなく、教育水準の高度化を目指し

て、敢えて4年制の専門学校として出発していたことです。そして、専門学校開校後まもなくして2代目学長に就任して教育にご尽力なさっておられた布施榮明先生が、新潟リハビリテーション専門学校の創立10周年記念誌に「思い出」を寄稿され、その文の最後部を「新潟リハビリテーション専門学校が大きな夢と共に地域に開かれた学校として、近い将来は開かれた大学として、地域と共に発展していくことを念願している」と結んでおられることではっきりと裏付けられるのであります。開校当初から、京都の「仏教大学通信教育部」と連携し、必要専門科目の単位を取得することで専門学校卒業と同時に、社会学士の称号が得られ、さらに大学院入学も可能になるようなダブルスクールシステムを導入しているのもその証拠であります。そして、もう1つ、明確な月日の記載がないので挿入された表示年月から推測するのみですが、恐らく2001（平成13）年頃に仕上げられたと思われる「新潟はまなすりハビリテーション大学設立期成同盟」による「大学設立構想案」という印刷物が残されていることです。

2002（平成14）年末に初代より継承された的場已知

\* Corresponding author:

新潟リハビリテーション大学

〒958-0053 新潟県村上市上の山2-16

Tel : 0254-56-8292

Fax : 0254-56-8291

E-mail : osawa@nur.ac.jp

子新理事長は、先ず、既設の鍼灸学科の改革と、看護学科の新設によって学園の基礎を固めつつ、新潟リハビリテーション専門学校の充実の方に力を注がれました。時恰も大学設立基準等が大綱化・自由化の方向に改訂され、専門学校でも2005（平成17）年からは就業4年（3,400単位時間）以上の場合に「高度専門士」の称号や「大学院入学資格」を得ることが可能になりました。また、大学院も研究者養成を主たる目的とした旧来の大学院とは異なって、社会的要請の多い、高度な専門的知識を備えた職業人やその指導者を養成する大学院として「専門職大学院」が求められる時代に移ってきたことでした。

常に長期的視野に立って先を見ておられる理事長の強力な統率の下、大滝、小田をはじめとする事務局員、伊林克彦先生ら教職員の寝食を忘れた御努力が結実し、2007（平成19）年4月に新潟リハビリテーション大学院大学の修士課程開始が認可されたのでした。すなわち、リハビリテーション研究科、リハビリテーション医療学専攻が新設されたのです。ここでは、摂食・嚥下障害に窮している患者が自らの口で食べて飲み込めるように支援する技術の研究・開発を行う「摂食嚥下障害コース」と、認知症や失語症など高次脳機能の障害に苦しむ人々を救うことのできる技術の研究・開発を目指す「高次脳機能障害コース」とに分かれて、理論と実践の融合に向けて出発したのです。13名の専任教員（教授9、准教授4）と17名の兼任講師が大学院出発時の陣容でした。以来、2012（平成24）年3月まで、計15名の修士学位受領者（摂食・嚥下障害コース10名、高次脳機能障害コース5名）を輩出しています。

全人口の中で高齢者人口の占める割合が相対的に高くなる「人口高齢化」、および出生率の低下による「少子化」については20世紀後半になって世界の先進各国で夙に「少子・高齢化」として注目されてきました。新潟リハビリテーション専門学校が開学した1995年はまさに我が国が高齢化率15%を超えて文字通り「高齢社会」に突入した年でもあり、リハビリテーション教育の意義を謳歌するにふさわしい年でありましたが、同時に、1990年代初め頃より「少子化社会」到来による教育への影響もひそかに懸念されはじめていました。

ここで話題が少し外れますが、理学、作業、言語聴覚士の養成校は本邦の人口高齢化率と歩調を合わせるように急激に増加しました。例えば、作業療法士は

1966（昭和41）年には1校（定員20名）のみだったものが、新潟リハビリテーション専門学校が設立された1995（平成7）年には58校（定員1690名）となっており、2000（平成12）年にはさらにその2倍の107校（定員3593名）、2005（平成17）年には3倍の156校（定員6575名）の如く急激に増加しました。しかも大学としての増加の比率が高かったのです。つまり、規制緩和による「養成大学の急増」と「少子化」とが合わさって「大学全入時代」に近い状況を作り出し、従来の専門学校教育推進に支障を来すようになったのです。因みに、新潟県下で最初に理学・作業療法士養成校であった国立新潟リハビリテーション学院は、こうした情勢をみて2003（平成15）年で閉校しました。特に、作業・言語聴覚士の希望者の減少が目立つようになりました。

2008（平成20）年に至り、本学園でも大学院大学の教育、研究の充実を目指して、改めて、新潟リハビリテーション大学「医療学部」を増設することとなり、併行して、従来の「専門学校」を閉校することが決定された訳であります。この学部増設には村上市の絶大な支援をいただきながら、2009（平成21）年5月に申請書類を文科省に提出し、5ヶ月後の同年10月に設置の認可を受け、2010（平成22）年4月に第1回の学部生入学式を迎える事になった次第です。

次に、教育理念について触れます。大学院大学として出発したからには、さらに高度な専門的知識と技術の習得を目指すことは当然でしょうが、併せて個々の院生には“人間としての魅力をつける”ことが求められました。欧米での大学教育の変遷の歴史をふりかえりましても、専門的知識と技術を備えた、いわゆる“専門家（specialist）”に対し、さらに人間的魅力を併せ持ち、社会の発展に貢献できるような“職業人（professional）”の養成こそが大学の使命であったことがうかがわれます。我が国でも明治以来、“教養をつける”あるいは“人格を陶冶する”ための大学教育が行われましたが、特に第二次世界大戦以降は、“教養”という言葉の持つ響きが知識偏重や、潜在的なエリート意識を彷彿させるためか、嫌われております。しかしながら、言葉による表現がどのように遷ろうとも、世界的視野、社会文化の広範な視点から物事を判断できる人間、倫理的素養に裏打ちされ、“人の心が分かる”学生、そして独創性を涵養しつつ常に社会に貢献しようと挑戦する意思、これらが“人間としての魅力”の内容になろうかと思えます。“高度な専門的

知識・技術”がこうした“人間としての魅力”に裏打ちされてこそ、医療を求める人に信頼され、その活動が社会貢献につながるのであって、的場理事長が学園の理念として掲げる“人の心の杖であれ”の精神に沿うことにもなるのであります。

学部教育においても、“人の心が分かる”人間的魅力に溢れたリハビリテーション職業人を養成すべく、地域に根差した良識と語学力の養成、基礎学科に立脚した専門技術の習得、学外実習を重視した教育に全力を傾けることになりました。

世界的にみても前途の極めて不透明ななかですが、教育面でも生涯学習時代、多彩な教育的個性が要求される時代、そして大学全入時代に移りつつある現代です。次々と出現するであろう難問を解決しながら、学部教育が今後実り多い発展を遂げますように祈念しつつ筆を措くことにします。

## 謝 辞

この文をまとめるにあたり、資料の収集と整理にお力添えをいただいた大滝かおり、小田奈美枝、原田慎司、竹部香代子の諸兄姉及びご助言を賜った伊林克彦教授に心から御礼を申し上げます。

## 参考資料

布施榮明（2004）：想い出，ゆめ－創刊号，北都健勝学園，41－42

宮前珠子，ほか（2005）：我が国作業療法の現状と今後の展望，聖隷クリストファー大学リハビリテーション学部紀要－創刊号，11－21

渡辺一郎（2010）：PT，OT，STの需給の現状と見通し，総合リハ，38（2），188－189

大学設立期成同盟（新潟リハ専門学校学生サポート協会）：新潟はまなすリハビリテーション（仮称）設立構想案

新潟リハ大学院大学沿革（2010）：平成21年度新潟リハ大学院大学年報，2－3

修了者・卒業生数（平成23年4月1日現在）（2012），ゆめ 北都健勝学園，8，76

砂原茂一（1980）：リハビリテーション，岩波書店

川田殖（1996）：人間理解の心理学と哲学，竹内正監修：医療言論，39－51，弘文堂

苅部直（2007）：移りゆく教養，NTT出版

